

会員と千葉県連盟をつなぐ

ちばニュース

2011年9月号



千葉県勤労者山岳連盟

Chiba Workers Alpine Federation

2011年9月10日発行 通巻221号(毎月1回発行)

夏山の思い出・ヒヤリハットの
投稿をお待ちしています

9月号 目次

9月号目次		2
東葛山の会・35周年記念山行報告	安彦 秀夫	3
「私の一名山」	添田 敏之	7
吉尾 弘さんを偲んで「お花とワインを」	う沢 喜久雄	9
石巻支援に参加して	高橋 重	10
ハイキング委員会リレーエッセー	小川 誠二郎	12
全国連盟対策本部報告	広木 国昭	14
県連たより		15

表紙 説明

表紙は、「東葛山の会35周年記念山行報告」を総リーダーの安彦さんが目的地選び・各パーティー別計画・緊急連絡先、そして当日の天気予想・ゲリラ豪雨への対応など苦勞のあとが良くわかります。

双六小屋との交渉も大変だったと思います。その小屋の、全面的な協力を得ることが出来た、そして、天気すら味方に変えてしまった。

各界の記念山行などの、立案から実行の参考にしていただきたいと思います。

35年の確かな会活動・山行を感じる報告です。この記念山行に東葛山の会の実力・真面目さを強く感じる事が出来ます。

原稿が少なく頭を抱えている時に、この投稿はありがたかった。

私のピンチには、いつもお助けマンに変心する東葛山の会の皆さん、そして高見さんありがとうございます。
(編集委員 広木)

創立35周年記念双六小屋集中登山敢行！

東葛山の会

安彦 秀夫（総リーダー）

＜期日：2011年8月24～29日＞ 参加者：20名（男性9名、女性11名）

我が会の山行部が企画立案した記念山行は、天気予報とは異なり、比較的天候に恵まれ、大成功裏に幕を閉じました。実施までを振り返ります。

＜1＞先ずは目的地選び

来年2012年3月で、我が『東葛山の会』は満35年を迎えます。これまでも5年おきの節目の年に、記念山行やイベントの実施そして記念誌の発行等を行ってきました。

今回は、山行部が主体となり、記念山行の『日程』、『目的地』そして『登山形態』等を、早い段階から練り上げてきました。

会報5月号にて、『8月28日（日）午後3時 双六小屋集合！』とし、数ルートの推奨コースを紹介し、各コースへの参加希望者を募る…という北アルプスを舞台とした35周年記念山行としての『集中登山』が提案されました。

＜2＞各パーティーの計画

会員それぞれが希望のコースへの参加意思表示をし、何度となく各パーティーごとに打ち合わせが行われました。

『参加メンバーの体力を考慮して朝出発としながらも欲張りなコースを計画するパーティー』、『最小日数で目的の山を巡る効率的なコース選定をするパーティー』、『チョッと無理なコース設定ではないかなと思われるパーティー』、『余裕のあり過ぎる日程・コースではないのかなと思われるパーティー』等と、参加会員のこの山行に賭ける熱い思いを感じました。

当然、一部コース変更をしてもらったパーティーもあります。

そんな中、参加意思表示をしたにも関わらず、体調不良や事故、そして家族の都合などで泣く泣く参加見送りをした会員も10名程いました。

（次の機会には参加してね。）

結果として、『入山口4か所で出発日・コースが異なる7パーティー20名の参加』となりました。各コースは、次の通りです。

- ① 24日（水）朝出発、4名、七倉温泉入山（5泊6日）
- ② 24日（水）夜出発、4名、折立入山（夜行4泊5日）
- ③ 25日（木）朝出発、2名、七倉温泉入山（4泊5日）
- ④ 25日（木）夜出発、3名、折立入山（夜行3泊4日）
- ⑤ 25日（木）夜出発、4名、折立入山（夜行3泊4日）
- ⑥ 25日（木）夜出発、2名、新穂高温泉入山（夜行3泊4日）
- ⑦ 25日（木）夜出発、1名、一の沢林道終点（ヒエ平）入山（夜行3泊4日）

< 3 > 緊急連絡先

北アルプスの中央奥深い山域を今回の記念山行に選んだために、携帯電話の通話範囲が広がってきている現在でも、各パーティー間の連絡に各自の携帯電話を利用するという事は、『かなり無理がある、制限される、確実に連絡が取り合える保証はない』と判断しました。

そのため、『緊急事態が発生した場合の最低限の連絡方法を確保する必要がある』と判断し、今回の集合・宿泊場所とした『双六小屋』に事情をお話し、快く『緊急連絡先』をお引き受けいただきました。

勿論、『通常の連絡時間帯（現地山小屋及び事務所）』や、『緊急事態発生時以外は決して電話しない』等の、確認事項も参加者に徹底しました。

この際の『緊急事態』とは、『事故や体調不良そして天候悪化等で、双六小屋に集合時間までに到着できない場合のみ』とし、携帯電話から通話できない場合は、最寄りの山小屋の電話をお借りすること…としました。

< 4 > 留守本部設置

各パーティーの山行計画書や当日予定通り入山したかどうかの確認等を集約し、更に、全パーティーが入山した後の双六小屋への連絡窓口として、『留守本部』を設置しました。

『計画書』に関しては、参加メンバーの変更・増減やコース変更した場合は、速やかにメールにて、留守本部（山行部部長）及び今回の山行の総リーダーに連絡を入れることとしました。

各パーティーの当日の入山連絡について、一部不手際・勘違いがありましたが、幸い、入山後に携帯メールで連絡が取れ、ほぼシュミレーション通りに全てが運ばれました。これは、各パーティーの綿密な計画と天候に恵まれた賜物と思っています。

< 5 > 山行決行か中止か？

山行期間の長期天気予報によると、決して良い予報ではありませんでした。加えて、各地でゲリラ豪雨が相次いでおり被害状況がテレビ等で報道されていました。

当然のごとく、山行実施日前の最後の例会（8月17日）では、参加会員から『山行を予定通り進めるか、中止するか…の決定をどのようにするのか？』という質問がありました。

最も早く入山するパーティーの意向を確認し、『23日（火）正午までに、総リーダーから各パーティーのチーフリーダーに、携帯メールにて連絡する。各リーダーはメンバーにその結果を連絡する』ということを決めました。

運悪く、台風が2個も発生しており、天気予報は雨でした。しかし、23日朝時点での気象概況を見て、私達の入山中は少なくとも台風の影響そして豪雨は受けないだろう…と判断し、23日朝に、『予定通り決行！』のメールを流しました。

双六小屋に集合した後で聞いたことですが、『決行！』のメールにかなり驚いたパーティーもあったようです。参加者同士で決行の賛否を取り、その結果が半々だったとか…。

< 6 > 双六小屋に笑顔で集結！

入山後の前半は、曇り・霧・雨に見舞われ、展望は望めませんでした。後半の27日（土）からは、真夏を思わせるような好天に恵まれ、各パーティーは北アルプスの山々そして谷・沢等を全身で堪能しました。

『深田久弥日本百名山』を指折り数えながら登った会員、温泉に必ず入ることを最大の目的にして参加した会員、高山植物を愛でることが大好きな会員、以前にも登っているが悪天候のため展望ゼロだったのでリベンジする会員、足跡が付いていない空白山域を埋めたくて歩いた会員など、さまざまな思いで各コースを無事歩き通しました。

28日(日)、双六小屋に集合の日！

この日も好天に恵まれ、皆、大展望を満喫しながらの山歩きになりました。昼前には、2パーティーが到着。早速、ビールで乾杯！ 小屋の宿泊手続きをし、汗を拭いていたら、続いて鷺羽岳で一緒になったという2パーティーが到着！ 俄然、小屋前のベンチが賑やかになりました。更に1パーティー到着！ 賑やか・喜び更に倍増！

残るは4人組みの2パーティー。皆、双六岳からの下山道を「次はどのパーティーが現れるだろうか…」と話しは途切れません。「頭が見えた！いち…、に一…、さん…、し…、4人だ！」、「先頭は誰それ、後ろは…」と興奮はエスカレートしていきます。豆粒大に見える動く物体を皆言い当てるのですから…。

(当然、間違いもありました。)

そろそろ集合時間の3時に…。やっと現れました！最後のパーティー。先着16人が並んでお出迎えです。迎える側、迎えられる側、皆歓喜の一瞬です。涙ぐむ顔も…。

「こんな歓迎を受けるなら、最後に来れば良かった…」という最初に着いたパーティーからの声でした。全員無事揃い、歓喜の興奮の中、記念写真を双六小屋の女性スタッフにお願いして、2枚撮っていただきました。

「出発直前に急遽準備した特製の横断幕」と「会のイメージカラーの小さな会旗」を掲げ、約半数が踏んできた「鷺羽岳」をバックに1枚、そして、「花の百名山の著者・田中澄江さんの揮毛した「双六小屋」の看板のある小屋の玄関前で1枚。

コースを踏破できたことと、無事に皆と会えたことによる満足の顔・かお・カオ…。

夕食時には、小屋からのビールの差し入れがあり、先ずはカンパイ！ 食べることとこれまでの山であったことの話で、あちこちで盛り上がりました。

夕食後に、小屋のご厚意により食堂を1時間開放していただき、興奮が未だ残っているパーティーからの次から次への報告で、更に賑わいました。

約束の時間午後7時になり、部屋に戻り眠りに就きました。しかし、いつものことながら、夢心地に直ぐなる人もいれば、バックグラウンドミュージックに真夜中になっても眠れなかった人もいたようです。

(良い妙案はないでしょうか？)

<7>皆揃って下山

早めに新穂高温泉に着きたいということで、朝食時間を4時30分に繰り上げていただきました。ご来光(5時20分過ぎ)を皆で迎えた後、小屋のスタッフの皆さんにお礼と別れの挨拶をし、サブリーダーを先頭に長〜い列をなして出発！ 前方に笠ヶ岳が見えます。左手には槍・穂高連峰が…。後方にはドンドン小さくなっていく双六小屋が…。

鏡平では、池に写る槍・穂高連峰を、水面ぎりぎりまでしゃがみこみシャッターを押す人・ひと・ヒト…。槍の穂先が木々の間に小さく顔を出して水面に写っています。「もっと大きく見えると思った。時間や季節によって大きく見えるのではないか？今日は朝だから小さいんだ…」等と勝手な会話があったようです。ホントかな？

わさび平では、りんご、トマト、きゅうり等が山からの水で冷やされて売られていました。乾いた喉には最高でした！ でも、チョツと高くない？

新穂高温泉に予定の時間よりチョッと早めに着くことができ、あらかじめ連絡しておいた『中崎山荘 奥飛騨の湯』にて、山の汗を流し、改めて無事下山を祝して、生ビールで乾杯！

良い気分になったところで、いつもお世話になっている鎌ヶ谷観光バスの中型観光バスに揺られて一路鎌ヶ谷へ。(運転手さん、安全運転いつもありがとうございます。)

鎌ヶ谷には、午後8時半ごろに着き、思い出を胸に秘め、各自の家路に就きました。

<8>振り返って

3. 11の東日本大震災を受け、6月末まで山行自粛をしている中で、今回の記念登山の計画がスタートしました。そのためか、なかなか会全体としての盛り上がりが見られず、やきもきした会員もいたことと思います。8月に入り、雰囲気もやっとその気になってきたようでした。

今回は、『参加されなくても快く裏方に回ってくれた会員』、『双六小屋の緊急連絡先快諾と現地でのスタッフ一同の歓待』、『新穂高温泉中崎山荘奥飛騨の湯でのゆったりとした時間提供』、『鎌ヶ谷観光バスの協力』、『各パーティーが宿泊した山小屋での歓待』そして『各登山口までの交通機関の定時運行』等により、記念山行は一人の落後者も無く、無事終了することができ、途中からまとめ役を引き受けた者として、安堵感でいっぱいです。

加えて、後半からは、天気予報が大外れし、真夏を思わせるような好天になり、それが下山する時まで続いてくれたことは、更に参加者個々人に強烈な思い出を与えてくれたことと信じています。

単独の山歩きも面白いですが、仲間と登り一緒に楽しむ山も喜びが倍増し好きです。仲間に感謝します。ありがとうございます！

(2011.9.3.Sat.)

編集委員会からのお願い

1年以上続いた「私の一名山」シリーズが、8月号で完了しました。

今月号からは、個人の「一名山」シリーズをスタートさせました。

今回は、「シリウス山の会」の添田さんが投稿してくれました。

これで「一名山シリーズ」が切れることなく継続出来てホッとしています。その投稿には山行中に「マムシ」を食した報告がありました。大いに参考にしたいところですが、「・・・」は、まずないでしょう。

10月号は、夏山の思い出・ヒヤリハットの投稿を期待しています。気楽に投稿をして下さい。出来れば写真を付けてくれると助かります。

原稿は **MS明朝 12** で

ページレイアウト 左右25 上下12

でお願いします。

私的一名山 心躍った八海山：思い出2題

シリウス山の会 添田敏之

10年前、定年退職をしてきて、何をしようかと思った時、当会の前身の会の山行参加の呼びかけを知りました。これが新人の入会面接を兼ねていたらしく参加後、入会出来ました。

以下の文は当時の会の機関紙に投稿・掲載されたものです。

山行日 2001. 10. 7/8 (日/月)

1. 出た！ブロッケン 愉快、痛快、爽快

「ひとつ山越しゃホンダラカホイホイ♪♪」。こんな歌があったなあ。「越しても越してもホンダラホダラカホイホイ」と続く。大日岳から千本檜小屋迄の鋸の歯のような八つ峰の縦走がまさにそうだった。初日、ビギナーの私を含む4人のパーティはここを通らず迂回路を歩くはずだった。ところが鈴沢リーダーは私達の体力を密かに観察していたようで、最初の鋸歯である大日岳に誘導し、ここを登りましょうと提案した。岩場から垂れ下がる10数m程の縦鎖を見て一瞬ビビッタが、一人で迂回路を歩く気にはなれず、登りましょうと強がって返事。かくして私にとっては初めての鎖に頼ってのUp & Downが始まった。

天候は絶好、暑くなく、寒くなく、風も弱く時々ガスが出る。恐れつつも気分はHigh。愉快、痛快、爽快。鎖をしっかりと握って眼下を見れば、峰の周辺は白い石畳状の一枚岩の連続だ。そして石畳の縁は紅葉した草に囲まれている。岩は白い田で縁は紅い畦道のように見える。岩が途切れた先は今が見頃の紅葉、黄葉。東北方向には駒ヶ岳も見える。さてリーダーの体の動きを見習いつつ、3点確保で更に前進。左から西日を浴びて行程の中程の鋸歯の頂上に至った。東側にガスが流れてきてガスに虹がかかっていた。虹だ、虹だと後続の米田さんに声をかけて更に眼をこらすと何と、何と自分達の影がガスに映っている。これぞ噂に聞くブロッケンだ。びっくりプラス嬉しさと両手を横に伸ばしゆっくりと上げ下げしてみる。ガスのスクリーン上の大きな影絵の手も動く。残念なのは首から上が映っていない。それでも予期しない自然からのプレゼントに心躍った。影絵は1分に満たずして消えた。幸運でした。

2. ジャバミ人間：なんとマムシを食べちゃった！

2日目、ベテラン5人組と合流し9人となったパーティの中で、多分私一人がへろへろになってたどり着いた下山途中の水場は、地図上ではジャバミ清水とあり、現場の表示は「蛇食み清水」とあった。

この言い方に従うとパーティの数人はジャバミ人間と言う事になる。何故なら前日マムシを食べたからである。以下に顛末を記す。

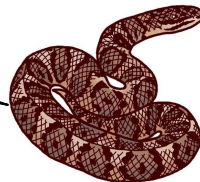
マムシ調達地	現地、新開道登山道
発見者	鈴沢リーダー
トドメ	澤木さんがストックを使って
事態の目撃証人	米田さん
生前のマムシ	リーダーの挑発に鎌首を持ち上げてファイテングポーズをとるものの寒さのせいか動きが緩慢。夏のマムシなら跳躍して攻撃があったかもしれない。

マムシを運んだ人	私、添田
何故運んだか	初めて自然の中のマムシをみて銭型模様の鮮やかさに、その場に打ち捨てるには惜しいと思った。別道に行くベテラン5人組にも見てもらおう、ひょっとして食べられるかなあとも思った。
料理人	千本檜小屋のオヤジ
料理法	皮を剥いだ後に炭火焼
食べた人	男性7人中の6人 2人の女性は手をださず
味	カリカリに焼いた鮭の皮に似ている。脂っこく、いける。

後記：マムシとは言え、自然の中の生き物は殺したくはなかった。

成り行きで食べてしまってマムシさんごめんなさい。（文中の人名は仮名です）

マムシ・レクチャー



日本蝮は、クサリヘビ科マムシ属に分類される。俗に、マムシと呼ばれる「毒ヘビ」

特徴：体型は胴が太く短い

頭が三角形

体全般に、銭形の斑点がある。

生態：北海道から九州に分布。森林、藪に生息し、特に水辺周辺に多い。

日中でも「とぐろ」を巻いた姿は驚異。

夜の赤提灯に誘われて「とぐろ」を巻いている誰かとは迫力が違う。

噛まれたら・・・

年間、約3,000人が被害を受け、5～6名の死者が出る。

- どうなる
 - ① 20～30分後、激しい痛み・出血・腫れ・発熱などの症状が出る。
 - ② 1時間以上経過して症状が出ない時は毒が注入されない可能性あり。
- どうする
 - 良く言われている緊急対応として、次の事は実施しない方が賢明である。
 - ① 咬傷部より心臓側で軽く緊縛する。
 - ② 咬傷部を切開し、口で吸引するのは絶対に行わない。
- 体を激しく動かさない。（毒の回りをはやくする）
- 6時間以内の血清投与を行う。

まず、噛まれないこと・からかわないこと・手など出さないこと。

想像以上の素早さで反撃します。

出くわしても、何もしなければ安全です。にらめっこになり、先方が引きます。

吉尾 弘さんを偲んで「お花とワインを」

ふわくHC う沢 喜久雄

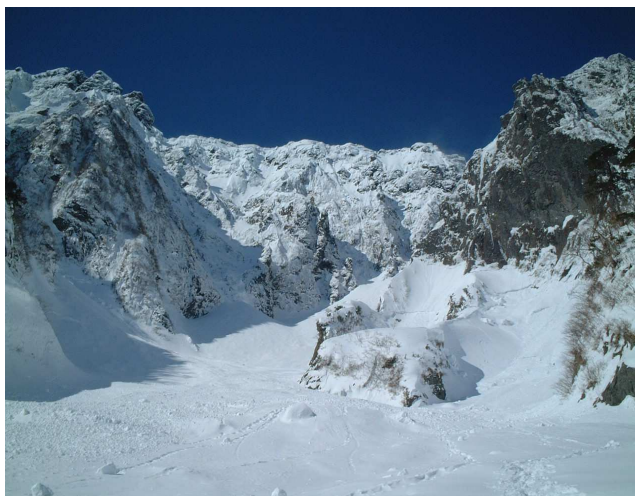
いなかのお盆前の8月9日に、谷川岳ゼニレイ沢にある吉尾 弘さんの慰霊碑に、お花と好物のワインをお供えして来ました。

土合山の家入口の先にある土合橋でバスを降り、湯檜曾川沿いの清水峠新道を歩き、ヤチガ沢合流点を一本橋で渡ると、その先に一ノ倉が合流して来て、湯檜曾川の川原が広がる。その対岸は、白毛門から流れ落ちて来るゼニレイ沢の合流点で、ここの露岩に吉尾弘さんの慰霊プレートが埋め込まれている場所だ。

この川原の石の間に、お花とワインをお供えして、千葉県連の現状を報告し、労山の組織を広く大きくした運動の思い出にひたって来ました。

ここから湯檜曾川を背にして、上の旧道に向かって一気に登り、雪溪の消えた一の倉沢の出会いで小休止して汗をぬぐう。ニワカ雨が来そうな空だったが、一ノ倉沢の滝沢やツイタテ岩を改めて眺めて、帰り来た。登山指導センターの手前では親子の野ザルが遊んでいた。

2011年8月11日・記す



一ノ蔵沢（6月）

- 投稿時に、文章と写真を送っていただきました。写真の明暗の関係でスキャナがうまくいきませんでした。鵜沢さん申しわけありません。私が6月に、南陵に行った時に撮った写真を使用させていただきました。（広木）



石巻支援活動に参加して

岳人あびこ 高橋 重

梅雨が明けた7月15日～18日、千葉県勤労者山岳連盟の東日本大震災石巻支援に参加した。15日夜松戸に集合し、岳人あびこ2名（中村隆泰さんと）は県連理事長車に乗せていただいた。東北道菅生SAで入山祝い後、テントで仮眠した。翌朝8時前、JA石巻北上支所に県連の30人近くが集まった。目の前の桃生訪問看護ステーションの中は無残、津波が到達した身長の高さに黒い線が残っていた。その先にはガラスが割れ、室内に電線が垂れ下がり、玄関にソファが立っていたり、冷蔵庫が倒れていたり、瓦礫で埋まった家が何軒もあった。この目で初めて見る被災地のひどい光景だった。

作業は北上川沿いの田圃のガレキを畦縁に集め、重機が入って撤去できるようにするものだった。自衛隊が生存者を探すため集めたガレキの小山もあるが、田圃の中はガレキだらけ。家の柱、壁材、畳、布団、ヌイグルミ、冷蔵庫、ノート、靴、置物など生活の臭いのするものばかり。木材は釘が出ていて底の薄い長靴では注意しないと危険だ。一輪車と人力、そして小さなキャタピラ1台で午後3時頃までかかり多くのゴミを片付けた。田圃の塩分を水で流す作業を繰り返す予定だそうだが、水路は流された車が逆立ちしていたり、壊れたり、ガレキが詰まったりしている。どこもヘドロが積もっている。稲が出来るまでは、まだまだ遙か遠い先に思える。それにしても人の力は大きい。これがたんぼ？が田圃らしくなった。まだまだ人の力が必要だ。

作業後、多くの子供たちがさらわれた大川小学校付近へ行く。直ぐ近くの新北上大橋は流されているので、対岸までグルッと廻り、途中土台だけの家、1階だけ津波に破壊された穴だらけの家、打ち上げられた舟、廃墟と化した土地を見て声も出ない。被災の小学校を望む橋の袖には、壊される前の写真や花束や水が供えられていた。小学校の奥は跡形も無く流されている。なすすべも無く流された多くの子供達、背後の急な斜面に逃げられなかったのだろうかと心が痛む。近くの橋の破壊も凄まじかった。これまで以上のひどい光景に厳しすぎる、と頭が真っ白になる。

道の駅「上品（じょうぼん）の郷」で風呂に入る。芋の子を洗うようだった。皆ボランティアだろう。途中夕食の材料を調達し、水沼構造改善センターで、交流会を行った。センターの時計は動いていたが、地震の影響が大きく傾いていた。

今回の支援メンバーは82歳を頭に70代の方も結構おられたようだ。田圃や交流会で、私より先輩達の元気さを見て、この先まだまだ山へ登れるぞ、と少し得をした気分になった。帰る日まで、どこへ行っても『ハエ』が多かった。

翌朝、再び北上支所に集合。千葉県連会長や群馬、茨城、東京練馬などのメンバーが増えた。今日は朝から快晴、気温も高く、スタートからキツイ。30分～40分に一回、休憩を取る。カンカン照りなので、あぜ道の車と車に張ったタープで休む。

水分補給量が減茶苦茶多い。タオルで頬かむりし、麦わら帽を被るが顔を流れる汗は滝のよう。目にこれほど汗が入ったことはこれまでに経験がないほど、3年分くらいの汗をかいた気分だ。午後には船橋山の会の数名も加わった。片付かないので

はと思っていた大量のガレキ撤去作業が進む。今日も年長の方、女性陣のパワーに圧倒される。休憩時には冷たい果物や梅干も配られる。3時前終了の掛け声、手を着けたところだけは見回すとかなりスッキリした感じになった。いやア～汗かいた。

夕刻、宮城労山赤間会長、石巻労山岡会長が出席した交流会となる。「被災者の気持ち、環境はまだまだマイナスの状態。ボランティアの中にも被災者を傷つける人もいる。組織で支援してくれることはありがたい云々・・・」地元岡さんからの話はジーンと来る。乾杯が終わると、昨晚同様、他の会の方たちとも直ぐに打ち解ける。先日支援に行かれた武内さんの言われたとおり、共通の趣味を持つ仲間だからだろう。

18日の朝は早くから「なでしこジャパン」のテレビ放送があった。優勝が決まり、食事前から大いに盛り上がる。作業無しで解散となる。私たちは、岡会長夫人のご案内で地元の水沼山に出掛けた。山頂には鎮魂・復興祈願の碑が建てられ、登山口には今日、一段と映える「ナデシコ」が咲いていた。その後見た途中の風景は、基礎だけ残った家、転がされたコンクリートビルなど、想像を絶する。高台の女川町立病院の駐車場は、4階建てのビルより高い所にあるが、病院1階まで津波が来たという。そのビル屋上の茶色く枯れた木、いくつものゴロツと横になった建物に言葉が出ない。

市内の万石浦付近は被害が少ないが、日和公園から見た海側はひどい状況だった。被災後片付けられ、山積みとなったおびただしい数の車。地盤沈下のため水が溜まった土地、流された周囲の建物の中に残った石巻市立病院の対比など異様な光景だ。この高台に避難した人も多く、11日には地獄絵だったろうと心が裂けそうだった。あの辺は繁華街だったのだろうか。公園での休憩中、下の方から、オカリナで「ふるさと」を繰り返し演奏するのが聞こえる。のぞき込むが姿は良く見えない。海に向って吹いている。「♪忘れ難き故郷～♪」が耳に響く。何とも表現できない気分、厳しすぎる。田圃で見たヒバリとカモの卵、早く飛び立って欲しいと願う。他は、もう見たくないと思った。

6月に、1970年の大地震でワスカラン6,768mの氷河が崩れ落ち2万人が埋まったままのペルー：オールド・ユンガイの街に寄った。地震はどこにでも、時を選ばず起こる。地震に伴う自然現象の怖さ、県連吉田理事長の「見たことを、伝えてください」との言葉が身に浸みた石巻だった。



北上地区の田んぼの ガレキ撤去



操作がプロ級に上達した 理事

スペイン巡礼記

岳人あびこ・小川誠二郎

去る5月10日から6月30日まで50日間、主にスペインに旅行し、そのうち、5月12日から6月14日までの34日間、サンチアーゴ・デ・コンポステーラの巡礼の道を、相棒二人と三人で歩いて来ました。まずパリに行き、新幹線でバイヨンヌに行き、そこからバスでフランスの西南端の町で巡礼の出発点の町サン・ジュアン・ピエ・ド・ポーに行き、そこで巡礼のスタンプ帳を貰い、アルベルゲ（巡礼宿）に一泊、翌5月12日から巡礼の始まり。この巡礼は、サンチアーゴ即ちセント・ヤコブがローマ帝国で布教していて処刑され、その遺体を弟子が運んで埋葬したとされるサンチアーゴ・デ・コンポステーラが聖地となり、そこへの巡礼が定着したというもの。初日は歩いてピレネーの山越え（標高差1200m、26km）でスペインに入り、ロンチェスバージュスのアルベルゲで一泊、その後も巡礼の道（巡礼の道はいくつかありますが、フランス・ルートというのが一番ポピュラーな道で、それを歩きました）を歩き、スペインの西北端の町で巡礼のゴールの町サンチアーゴ・デ・コンポステーラまで、777km（東京から岡山を越して尾道辺りまでの距離）を16kgの荷物を背負って34日間、毎日、一日平均24、5km、長いところで31、2km歩いて来ました。毎晩巡礼宿アルベルゲの大部屋の二段ベッドに泊り（一泊平均5ユーロ＝600円）、いびきの大合奏に参加しました。各自持参の寝袋で寝ます。大部屋に男女混ぜこぜで宿泊。ヨーロッパ各国からの老若男女、皆さんたくましく巡礼を続けていました。道中いろいろな人と交流しますが、各自歩くペースが違いますので、2、3日同じ宿とかのあとは後先に別れて、何日かのあとまた会って、という調子のご縁でした。家一軒ない麦畑を2、3時間歩いて村に入り、そこのBAR といって飲食のできる店で休息し、また歩く、という毎日でした。10kmおきくらいに村や町があって、そこにあるアルベルゲに予約なしで泊ります。宿に入ると温水シャワー、洗濯のあと、BAR でビール、夕食はアルベルゲの巡礼定食（だいたい10ユーロ、1200円でスープかサラダ、メインディッシュに肉か鶏か魚、デザート）か自炊、または近所のBAR かレストラン。朝、昼食はBAR か、前日に町の店で買っておいしたパン、チーズ、果物など、で過ごしました。5、6月のかんかん照りの麦畑の一本道は、空気が乾燥していますから日本ほどではないにしても、充分疲れます。西に向かって歩きますので、左腕ばかり日焼けして、2回皮が剥けたのに、右腕は大して日焼けしない、といった調子でした。ドイツ人がまじめな冗談で、明日からは右腕を南に向けて、後ろ向きに歩こうと思う、なんぞと言っておりました。道中、行き倒れで亡くなった人の碑がところどころに建っていました。日本人の碑もありました。歩き始めて5日目に、道に男の人が寝かされていて、74歳（私と同じ）のデンマーク人がいま死んだところだと警官が言い、通行禁止、迂回路を行けとの指示でした。

それを見て、無事完歩して帰国するのは大変なプロジェクトだと認識して、禪の紐を締め直したことでした。

カトリック信者でもない仏教徒が何故巡礼に来たのかとしばしば聞かれますので、その都度説明しましたことは、日本人は全員、悪いことをすると神様のバチが当たると信じている、その神様は漠然とした神様で、姿形は思い描いていない、これ、すなわち、イスラムのアッラーと同じ概念で、キリスト教、ユダヤ教の神様も同じ概念。つまり、日本人の神様も、イスラムのアッラーも、キリスト教、ユダヤ教の神様も、共通の神様、**COMMON GOD**だ、これを銀行に喩えれば、本店がその共通の神様で、神道、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教などは、主要な支店で、その下にそれぞれまた支店があると思えばよい、預金をどの支店でしても、結局本店で合算されるのと同じで、どの宗教で神様にお祈りしても、結局共通の神様 **COMMON GOD** に届くのだ、それゆえ、私は、どの神社、教会、モスクに行っても、敬虔なお祈りを捧げるのだ、と説明しておりました。そうしたところ、ある晩、アルベルゲの夕食のときに、フィンランドの青年とその話をしましたところ、その青年は大学の神学部の大学院を修了して、目下神父になる修行をしている身だが、彼が言うには、その **COMMON GOD** の概念に関しては、自分の考えとあんたの概念は **COMMON**、共通である。フィンランドで子供にその話をするのは立場上できないが、自分もあんと **COMMON** の概念、**COMMON GOD** の概念を持っている。その考えを世界の人を持つならば、宗教上の争いは意味のないことと判るはずだ、と言ってくれて、意を強くしました。

この巡礼は、年中世界から人が来て、年々盛んになっているそうです。7、8、9月が最盛期で宿は込むそうですが、5、6月は一日約200人が参入して歩いているように感じました。道は一本道で、黄色の矢印が至る所にペンキで印してありますので、道迷いの心配はほとんどありません。また、前後を見渡せば、必ず何人かの巡礼者が見られます。毎日24、5km歩きますので、靴は登山靴で正解でした。イタリア人の若者は、足の裏の皮がぺろんと剥けて、医者から3日間寝ていろと言われてしょげていました。私は毎朝両方の足の裏にテーピングテープを二筋貼り付けて出ましたが正解だったようです。長距離を連日歩くのは登山と少し異なるノウハウがあると思いました。

道中、年寄りとお見受けする人に年齢を聞いておりましたが、私の74歳を越える人には二人お目にかかっただけでした。一人は76歳のアメリカの男性で、お金持ちらしくてホテル泊まり、荷物はホテルが車で運んでくれる手配をしての巡礼、もう一人は見るからにホンモノの山男、80歳とは見えないがっちり構造のスイスの男性でした。70歳前後が限界のように感じました。 以上



この道は、サンチアゴ・デ・コンポステーラへ



はるかに続く一本道で相棒・二人と

全国連盟震災対策本部からの報告

全国連盟対策副本部長 広木 国昭

千葉県連盟の皆さんには、震災直後の4月から気仙沼・石巻での支援活動に大きなご協力をいただいています。

全国の支援活動については、登山時報・ろうさんニュース（第22号）などに各地方連盟からの支援ボランティア活動が紹介されています。

千葉県連盟の支援活動は、栃木県連盟の気仙沼市、唐桑半島に於ける支援活動と共に、全国に大きなインパクトを与えました。その後、京都府連盟をはじめ関西方面からの参加もあり、全国的に支援の輪が広がっています。

千葉県連盟は関東ブロックの支援活動隊の中心として、吉田理事長を先頭に気仙沼6回122名・石巻7回131名の参加協力が有りました。

支援活動は、受け入れ先があって成り立ちます。現在、全国からの支援隊は宮城県石巻市に集中して入っています。震災直後は石巻労山の被災会員宅の片付け作業、そして水沼地区のビーヌールハウス・農地のガレキとヘドロの撤去作業、現在は、広範囲な農地のガレキ撤去を実施しています。

これらの受入れ作業は、「石巻労山の岡さん」に地元責任者として、地元ボランティアセンターやJA石巻等との協議を一手に引け受けていただいています。

中でも「水沼東部構造改善センター」での宿泊は地元区長・センター館長とも相談していただき快く承諾していただきました、これにより、風雨の心配もなく、疲れた体を休め、参加者同士の交流も出来ます。同じ目的で集まった仲間が、ボランティアを通じて中身の濃い交流が出来ることは、この宿泊所があつての事です。

今後の、支援活動は新しい展開が要求されています。支援活動の内容、場所も見直しが必要でしょう。参加回数も多くなれば財政も厳しくなります。山行もかなり犠牲にして支援活動に参加しています。支援活動の場所も問題になるでしょう。

全国連盟対策本部としては、今後の支援活動についての方針を明確にする必要性があります。さらに、3月に一年をむかえる現地への支援、対応も新しい局面が求められると思います。

被災地の現状を把握して、適切な支援活動を全国の会員に呼びかける。それに応えて全国の仲間が息の長い支援活動を実施していただきたい。

千葉県連盟としても、今後の支援活動について検討していただきたい。その時期に来ていると思います。

全国の支援活動をリードし、最大の支援隊を送ってきた千葉県連盟として、今後の支援活動の方向性を検討していただきたい。そして、全国の支援活動のあり方について提言をお願いしたい。

そして、引き続き大きな支援をお願いしたい。

以上

県連たより

県連盟連絡先

◎ 千葉県勤労者山岳連盟事務所
〒262-0033
千葉市花見川区幕張本郷 1-29-18
レジデンス幕張台 101 号室
TEL・FAX: 043-306-1190
Eメール: rousanchiba@grape.plala.or.jp
JR 総武線幕張本郷下車、海側 徒歩 5 分

◎ 千葉県連ホームページ
<http://www.cwaf.jp>

◎ 「ちばニュース」原稿送付先
newstoukou@cwaf.jp

◎ 事故一報送付先
教遭委員長・岡田 賢一
ken-ichi@f4.dion.ne.jp
Fax: 043-271-4704
事故一報は、全国連盟事務局にも必ず
送付の事

◎ 連盟費振込み先
郵便振替口座 00160-3-481509
千葉県勤労者山岳連盟

◎ 東北関東大震災・支援金振込み先
口座番号: ゆうちょ銀行
00130-7-595190
加入者名 佐藤 勝子
〒272-0023
市川市南八幡 1-25-16

県連盟よりのお願い

・県連盟活動の中心は事務局です。その、県連事務局が解体状態です。
総会準備も始まります。現状では総会の開催もピンチです事務局のワンパートのお手伝いで結構です。
連絡をお待ちしています。
連絡先 広木 国昭
danphiro@zpost.plala.or.jp

支援Tシャツについて

・各界から多くの協力をいただいています。引き続きのご協力をお願いします。
・10月からの申し込みは、全国連盟事務局に直接申し込みをお願いします。
申し込み方法
申し込み用紙に、サイズ・色枚数を記入して全国連盟事務局に送ってください。

全国事務局

Eメール jwaf@jwaf.jp
電話 03・3260・6331
Fax 03・3235・4324
問合わせは 広木まで

編集後記

8月は支援活動がお休み、支援活動関連記事が無かったので、投稿が少なかった。来月からは、山行報告・思い出・ヒヤリハットの投稿がほしいです (danp)